【研究ノート】

「学修成果の可視化」に向けて

真部 真紀子・山下 浩子・山村 涼子・石井 妙子・安保 康治・ 江越 和夫・岡 輝美・眞谷 智美・髙松 幸子

A review of Visualization of the Learning Outcomes

MANABE Makiko, YAMASHITA Hiroko, YAMAMURA Ryoko, ISHII Taeko, ABO Kouji, EGOSHI Kazuo, OKA Terumi, MAMIYA Tomomi and TAKAMATSU Sachiko

This study is to review the visualization of learning outcomes. We use the "rubric", tried to visualize learning outcomes of "food project III. IV" actives. It conducted rubric on second-year student in the Department of Food Design.

The results are as follows.

Comparing before and after "Food Project III · IV" actives, it was found that the learning outcomes were obtained. The rubric is thought to be effective for students as well, since the learning outcomes are fed back to the students. From now on, it will be important to develop rubrics in line with curriculum policies, diploma policies and the syllabus.

Key words: visualization, learning outcomes, Rubric

キーワード:可視化、学修成果、ルーブリック

はじめに

文部科学省大学改革指針事業 大学教育再生加速プログラム テーマⅡ「学修成果の可視化」 実績報告書¹⁾には採択された8大学の取組が報告されている。江越らは²⁾、そのうち4大学に注目し、本学フードデザイン学科における学修評価の可視化について照らし合わせ、取り組む べき事項について検討課題とした。特に、専門知識・技能及び社会人に求められる汎用的能力、態度・志向に関する評価方法として学生自身の自己評価であるルーブリック評価の他に、客観的に測定可能とされている外部テストの PROGテスト (河合塾とリアセックが共同で開発した

ジェネリックスキルの成長を支援するアセスメ ントプログラム)で検証することの必要性を示 唆している。

目 的

本学科のフードプロジェクトにおける「学生の成長」を測定する手法としてルーブリックを用いてこころみ³⁾⁴⁾をもとに、本稿では「学修評価」の視点から、ルーブリックによるジェネリックスキルの測定の可能性に焦点をあて検討することを目的とした。

学修評価測定対象科目

2018 年度から新カリキュラムとして設定したフードプロジェクトは、1 年前期から 2 年後期までの 2 年間を通して、学生による「課題発見・気づき」、「解決策提案・企画」 そして「制作・実践」をアクティブ・ラーニングで進めていくもので、科目名としては「フードプロジェクト I・II・III・IV」の 4 科目である。よって2019 年度卒業生が 2 年間のフードプロジェクトを履修した初めての学生となる。1 年次履修の「フードプロジェクト I 及び II 」における「学修の成長」をルーブリックで測定し、前述の筆者らが報告している。

今回は2年次履修の「フードプロジェクトⅢ 及びⅣ」について同様にルーブリックを用いて 測定した。

1 年次の授業目的は【地域社会が抱える様々な課題について、主に「食育」の視点から食支援活動を中心に、各課題解決に取り組む姿勢を培うことを目的とする。特に、この科目では、地域社会からの要請を理解し、学生自らが主体となって企画・立案し、実践することで、地域に貢献することを目的とする。】とし、表1に示すように、外部講師の講義及び地域参画に多く取り組んだ。

表1 「フードプロジェクト I・II」の活動内容

	久留米市子ども未 来部	地域における子どもの「食」に 関する課題を、生活実態調査 をもとに報告		
外部講師に	久留米市農政部	久留米市の「食」への取り組み について、第3次久留米市食 育推進プランに沿った活動の 報告		
よる講	NPO法人わたし と僕の夢	就学支援事業における子ども の食育活動の報告と課題につ いての講話		
義実績	グリーンコープ生 活協同組合連合会	「食」の安全についての食育 講座		
	久留米市環境部	食の循環体験事業の事業説明 およびエコ・クッキング料理 教室の献立話し合い		
	Kurume こくさい Day 2018	久留米日米協会		
ii ii	信愛クリスマスシ ョップ	株式会社ハイマート久留米		
地域参画の	食の循環体験事業 エコ・クッキン グ料理教室	久留米市環境部		
実績	就学支援食育ボランティア (2回)	NPO法人わたしと僕の夢		
	くるめフォーラム 2018*	久留米女性週間記念事業実行 委員会・久留米市		
	三井中央祭*	三井中央高等学校文化祭		

*フードデザイン学科の他の科目と連携

本稿の対象科目である 2 年次の授業目的は 【地域社会が抱える様々な課題について、主に 「食育」の視点から食支援活動を中心に、各課 題解決に取り組む姿勢を培うことを目的とする。 また、学生が主体的に研究課題を設定し、地域 社会と連携した活動を行うことにより、自己研 鑽力および栄養士としての専門性を高めること を目指す。】である。その目的に伴い、活動した 内容を表 2 に示す。

下線部分は1年次と2年次の大きく異なる点であり、より専門性を高める活動内容を求めるものである。

ルーブリック評価表の内容

「ルーブリック」とは、評価規準となる評価 項目とそれぞれに記述式で表した評価基準がクロスした表である。

	活動名	主催・連携団体	活動内容
フード	久留米菓子祭り「うま かつ祭」	久留米菓子組合	こども和菓子体験教室において子どもたちに和菓子作りを教えた。
ドプロジ	エコ・クッキング	久留米市環境部	食の循環体験事業イベントの中で、野菜の廃棄を最小限抑えた料理を子 どもたちと一緒に調理活動を行った。
ェ ク ト III	就学支援食育ボランティア	特定非営利活動 法人わたしと僕 の夢	当法人の無料塾に通う小学生や中学生と一緒に調理活動を行った。
	久留米市民大感謝祭 市場祭り	久留米市中央卸 売市場	久留米市中央卸売市場において、多くの来場者に商品の販売活動を行っ た。
	食を通して広げよう健 康の和~聞こえる人と 聞こえない人の輪~	食と健康の和協 議体	NPO 法人栄養ケア・ちっご、柳川市聴覚障害者協会および本学が協議体となり、聴覚障害者や聞こえにくい人や家族を対象に減塩の食育指導の媒体を作成し指導した。また調理実習を一緒に行った。
	学生による子ども向け 講座	高等教育コンソ ーシアム久留米	子ども向けの媒体を作成し、子どもたちに体験型食育指導を行った。
フード	久留米リハビリテーション病院コラボ企画	久留米リハビリ テーション病院	久留米市内にある本病院が取り組むスマートウェルネス拠点整備事業 (国土交通省)に協力大学として業務提携している。 病院利用者・家族、スタッフ、地域の方を巻き込んだ参加型のイベント
プロジ			を企画運営するために、病院を訪問し、理学療法士の方のお話を聞き、 施設見学を行い、グループで企画を立て、プレゼンした。
エク			【収穫祭】企画では、学生による「手作り餃子教室」と地元農家の野菜 を使っただご汁販売など、ご近所の方や利用者の方と一緒に楽しんだ。
IV			【信愛カフェ】企画では、学生によるレシピ考案および併設のカフェを 1日限定の学生による「信愛カフェ」を営業した。
	食育・保育教材開発と 実施	久留米信愛幼稚 園	【食べ物カード】企画では、子どもたちに食べ物にはそれぞれに栄養が あることを知ってもらうことを目的に、子どもたちがわかるような食材 の絵を描いたカードを並べ、料理に使われている食材を子どもたちが選
			び、学生がその食材の栄養について説明する栄養指導を行った。 【カリブロ】企画では、子どもたちに野菜の名前をたくさん知ってもら
			うことを目的に、特に久留米特産野菜の「カリブロ」を人形劇と紙芝居 で紹介し、実際に「カリブロ」をさわったり食べたりする機会を設けた。

表 2 「フードプロジェクトⅢ・Ⅳ」の活動内容

本稿のルーブリック評価表は表3に示すよう に、フードプロジェクトⅢ及びⅣの科目を別紙 に分けず、2 科目を通しての自己評価ができる ように改良した。理由としては、前述の報告で 考察したように、2 科目つまりフードプロジェ クトIVの評価表を新たに提示することで、フー ドプロジェクトⅢ受講後の自己評価が、半年後 のフードプロジェクトIV受講後には学生の意識 から消去され、新たな自己評価になることを危 惧したからである。このことから、学生の継続 的な自己評価ができると考え、すべての評価項 目にフードプロジェクトⅢ及びⅣの「受講前の 自己評価」、「受講中の自己評価」、「受講後の自 己評価」の記入欄を設けた。また、合わせて「受 講前の目標設定」と「受講中の目標設定」も回 答を求めた。

調査対象は、久留米信愛短期大学フードデザイン学科、2018 年度入学生 18 名である。

調査時期は、「受講前の自己評価」と「受講前

の目標設定」はフードプロジェクト \mathbf{III} の2回目の授業日 (2019年4月19日) に、「受講中の自己評価」と「受講中の目標設定」はフードプロジェクト \mathbf{III} の最終授業日 (2019年8月2日)に、そして「受講後の自己評価」はフードプロジェクト \mathbf{IV} の最終授業日 (2020年1月30日) にそれぞれ記入させた。

調査方法は、全員が同じ時間に回答する一斉 記入とした。記名式であるが本科目の成績評価 には無関係であることを説明した。

結 果

1. 回答率

調査対象学生 18 名中、すべての調査日に回答 している学生は 14 名 (77.8%) であった。その ため、集計及び解析は 14 名の学生の回答のみ とした。

表3 「フードプロジェクトIII・IV」で使用したループリック

フードプロジェクト皿・IV ルーブリック

フードデザイン学科 2年	4 番 氏名				
1 1 1 1 1 1 1	17 节				
(A)味超を除汰する力()	J(对踩建垒健力)				
計価項目	キャップストーン(Capstone) 事終的に獲命すべき型雑甲種	マイルストーン(Milestone) ゴールに向けた中間目標	ン(Milestone) た中語目編	ベンチマーク(Benchmark) 非谷に日指す確成日標	自己評価 【各評価項目ごとに数値①~④を記入のこと】
	ACTION CONTRACTOR			AN ION - HITH / VEIWHIM	
型品	④ ファイナル・ステップ	③サード・ステップ	②セカンド・ステップ	①ファースト・ステップ	日保設元 【各評価項目しとに数値①~④を記人のしと】
8 1 6 1 1		自分がしてみたいことに加え、 <u>今、自分に求められている</u> 課題の内容を達成するための企画	<u>とき、自分に求められるで、自分がしてみたいことに加え、会、自分に求め、含、自分がしてみたい課題の内容を達成する。合、自分がしてみたい課題の内容を達成する</u> 意成するための企画や計 <u>られている</u> 課題の内容を達成するための企画 :	今、自分がしてみたい課題の内容を達成する ための企画や計画を立案することができる。	安議市の自己評価 安議中の自己評価 安議後の自己評価 [] [] [] [] [] [] [] [] [] [
* 古の画は	■を具体的(作業内容、スケジュール、役割分担)に立案することができる。	8、スケンュール、役割分 や計画を具体的(作業内容、スケンュール、役 シュール、役割分担」に立案することができるできる。	シュール、役割分担)に立案することができる。		必要性の目標等所 必要中の目標等所 しまり しょうしん
10 de	立案したプランを計画的に実施すると共に、想定外の事態が起きた場合、自らその状況と場	立案したプランを計画的に実施すると共に、想定外の事態が起きた場合、他者の助言を参考	的に実施すると共に、想「立案したブランを計画的に実施すると共に、想「立案したブランを計画的に実施すると共に、想「目標の達成に向けて、立案したブラン通りに、 場合、 <u>自らその状況と場</u> 「定外の事態が起きた場合、 <u>他者の助言を参考</u> 「定外の事態が起きた場合、 <u>他者の援助を受け</u> 「計画を実践することができる。	目標の達成に向けて、立案したブラン通りに、 計画を実践することができる。	受護的の自己評価 受講中の自己評価 受講後の自己評価 【 】 【 】 【 】 【 】 【 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 】 【 】
計画の美珠	<u>面を分析することにより、計画を修正・変更し、</u> 当初の目標を達成することができる。	に、自ら計画を修正・変更し、当初の目標を達 <u>ながら計画を修正・変更し、</u> 当初の目標を達成 成することができる。 することができる。	<u>ながら計画を修正・変更し</u> 、当初の目標を達成 することができる。	•	母親曹の目輩影院 安羅中の目蓋影に 【 】 】

(B)他者と良い関係を築	B)他者と良い関係を築き、チームで恊働できる力(対人基礎力)				
評価項目	キャップストーン(Capstone)	マイルストー	マイルストーン(Milestone)	ベンチマーク(Benchmark)	自己評価 【各評価項目ごとに数値①~④を記入のこと】
	数称的に強作りへは到達申録		コーノビニアルナ三甲条	取が1、目指9.達成日標	国権股庁 【 各評価項目[とこ数値()→(4)を記入のこと]
型點	④ ファイナル・ステップ	(3)サード・ステップ	②セカンド・ステップ	①ファースト・ステップ	
· \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$ \$	レールを十分に理 カすると同時に、地	を理解・遵守 こ、他者の模	クラスやチームで約束したルールを概ね理解・ 遵守し、他者に協力するという意識を持ちなが	7ラスやチームで約束した <u>ルールをある程度理</u> そし、他者に迷惑をかけないという意識を持ち	受講的の自己評価 受講中の自己評価 受賞後の自己評価 [] []
HT & CO . 388 BB . +LSG	<u>有の工場に立つて、即言・アトハイ人をすること</u> ができる。	トレイイなりのこと、問じなの行動などのことができる。	ない古場に参加することができる。	<u>はひら</u> 、活動に参加する「どびでする。	受講前の目標設定 受講中の目標設定 【 】 【 】
「リール」の日本を	相手の伝えたいことを <u>共感的に理解</u> し、その語 **Lのユニューケー、コ、ロ内容を簡潔に確認したり、質問に対する的確 **Lのユニューケー、コ、ロークスを	<u>的に理解し、その話</u> 相手の伝えたいことを理解した上で、その話の「相手の伝えたいことを理解できる。 、質問に対する的確 内容を簡潔に確認したり、質問に対する的確な 対しに対する的確		相手の伝えたいことに耳を傾けて理解しようと する姿勢がみられる。	受講的の自己評価 受講中の自己評価 受賞後の自己評価 【 】 【 】 【 】 【 】 【 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 【 】 】 】 【 】
1811CO TV-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1-1	、な返告をしたり、 <u>目がの考えを1広入ることができ</u> 返告 <u>かできる。</u> る。	조속 <u>가 'C</u> 건소, o			受講前の目標設定 受講中の目標設定 []
組織の中での意思疎通・	チームにおける自らの役割とボジションを <u>十分</u> に理解しており、チームの目標達成に向けて、	チームにおける自らの役割とポジションを理解 しており、チームの目標達成に向けて、自分の	とポジションを士分 テームにおける自らの役割とポジションを理解 テームにおける自らの役割とポジションを <u>握ね</u> テーム内で、自分に向が求められており、何を 目標達成に向けて、 しており、チームの目標達成に向けて、自分の <u>理題し</u> ており、チームの目標達成に向けて、 直 成すへきが(自らの役割とポジション)の <u>理解</u> は	チーム内で、自分に何が求められており、何を 技すべきか(自らの役割とポジション)の理解は	受験部の自己語者 受験中の自己語者 受験後の自己語者 しょうしょうしょう
連携行動	目分の役割を <u>メンハーとの強い連携・協力の下</u> に果たすことができる。	(役割をメンパーとの協力の下に果たすことができる。	分の役割をメンハーとの協力を意識しなから果ったすことができる。	<u> </u>	受講事の目標設定 受講中の目標設定 【 】
	ストレスを自分自身でコントロールする方法を 複数知っており、それを活用して、ストレスを発	ストレスを自分自身でコントロールする方法を 少なくとも1つは知っており、それを活用して、ス	ストレスを自分自身でコントロールする方法を ストレスを自分自身でコントロールする方法を ストレスを自分自身でコントロールする方法に ストレスを自分自身でコントロールすることは <u>女 複数知っており、それを活用して、ストレスを会 少なくとも1つは知っており、それを活用して、ストほぼ気づいており、それを活用して、ストレスを 知法と思っており、ストレスを会散・解消・模類</u>		受講的の自己評価 受講中の自己評価 受講後の自己評価 () () () () () () () () () (
イド イト を が は の に に に に に に に に に に に に に	散・解消・軽減することができる。	トレスを <u>ほほ発散・解消・軽減することができる。</u>	発散・解消・軽減するよう <u>努力している。</u>	する <u>方法を探している</u> 。 	を課計の目標設定 を課中の目標設定 [1

(C)自分から積極的に動く力(対自己基礎力)	1人力(対自己基礎力)						
評価項目	キャップストーン(Capstone) ■参加・第金サジャビル市画	マイルストージューニー	マイルストーン(Milestone) ゴーニーではよる中日書	ベンチマーク(Benchmark)	自己評価 【各評价	【各評価項目ごとに数値①~④を記入のこと】	④を記入のこと】
	版称型に彼体9 へい到達日係		第二三十二八十二二二十二八十二二十二八十二二十二八十二二十二八十二十二十二十二十二	取付1、日1月9 達以日標	目標設定 [各評	【各評価項目ごとに数値①~④を記入のこと】	4)を記入のこと】
幸	④ ファイナル・ステップ	③サード・ステップ	②セカンド・ステップ	①ファースト・ステップ			
1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	自分や他者の感情を理解し、思い通りにならな いことがあっても、常に冷静かつ建設的に対応	し、 <u>思い通りにならな</u> 自分や他者の感情に目を向け、 <u>通常の出来事</u> 自分や他者の感情に目を向けようとしている <u>脅かつ建設的に対な</u> <u>には冷静に対処することができる。</u> が、常に冷静に対処できるとは限らない。		自分や他者の感情に目を向けることはできるが、感情をコントロールすることができないこと	受講前の自己評価 【 】	受講中の自己評価 【 】	受講後の自己評価[
グーロュイトで言語	すること かできる。			1 කිරු.	受講前の目標設定 【 】	設定 受講中の目標設定 【 】	標設定
	モチベーションを向上させるための具体的な <u>方</u> 法(<u>秘訣)を複数知っており、</u> それらを活用し	モチベーションを向上させるための具体的な方法(秘訣)を <u>少なくとも一つは知っており、</u> それを	るための具体的な方。モチベーションを向上させるための具体的な方。モチベーションを向上させるための具体的な方。モチベーションを向上させることは大切だと思っ。「実験前の自己評価 2、それらを活用し 法(敵談)を少立 <u>くとも一つは知っており、</u> それを「法(秘訣)にほぼ <u>気づいており、</u> それを活用した「ており、今はその方法(秘訣)を探している。 【 2、それらを活用し 法(秘訣)を少立くとも一つは知っており、それを「法(秘訣)にほぼ気づいており、それを活用した「ており、今はその方法(秘訣)を探している。	モチベーションを向上させることは大切だと思っ ており、今はその方法(秘訣)を探している。	受講前の自己評価 【 】	受講中の自己評価]	受講後の自己評価 】
ナナハーノョノ	て、恵欲的に取り組むことができる。	活用して、大港の場合、意欲的に取り組むこと から意欲的に取り組むように努力している。 ができる。	から意欲的に取り組むように努力している。	:	受講問の目標設定	設定 受難中の目標設定 【 】	14数定
† { 4	活動の成果やふりかえりを通じて、それによって得られた、人とは違う強みや持ち味、魅力を	活動の成果やふりかえりを通じて、それによっ て得られた、自分の強みや持ち味、魅力を認識	Jかえりを通じて、それによっ の強みや持ち味、魅力を <u>認識</u>		受講前の自己評価 【 】	受講中の自己評価]	受講後の自己評価 []
10000000000000000000000000000000000000	認識しており、将来に活かせるという予測や確 信を持つことができる。	し、将来に活かせるイメージを持つことができ することができる。 a。		C漢然としたイメージを持つことができる。	受講前の目標設定	役定 受講中の目標設定 【 】	1488定
# # # # # # # # #	チームのテーマや課題に挑戦していく上で、自 分のやるべき仕事を <u>的確</u> に判断し、メンバーを	8戦していく上で、自 チームのテーマや課題に挑戦していく上で、自 ご判断し、メンバーを 分のやるべき仕事は何かを判断し、前向きに	チームのテーマや課題に挑戦していく上で、自 分のやるべき仕事は何かを考えながら、自ら取	_	受講前の自己評価 】	受講中の自己評価 】	受講後の自己評価 [
日土江・傾極江	<u>率先垂範しながら</u> 取り組むことができる。	取り組むことができる。	り組むことができる。	笛むことができる。	を解析の目標設定 【 】	设定 受酵中の目標設定 【 】	1 標設定

2. 評価項目別回答の推移

ップ」、「②セカンド・ステップ」、「③サード・ ステップ」及び「④ファイナル・ステップ」の 中から一つを選択する方法である。その回答は 「受講前」、「受講中」そして「受講後」の3つ の自己評価がすべての評価項目に得られること になる。その一覧を表4に示す。すべての評価 項目で「受講前」から「受講後」に向けて評点 ①が減少し、反対に評点④が増加していること がわかる。この推移が統計的に有意な現象なの かを確認するために χ²検定を行った。その結果、 (A) 課題を解決する力(対課題基礎力)グル ープの「計画の立案」、「計画の実践」、及び(C) 自分から積極的に動く力(対自己基礎力)グル ープの「自主性・積極性」の項目に顕著な有意 差 (p < .01) があることがわかった。また、(B)他者との良い関係を築き、チームで協働できる 力(対人基礎力)グループの「規律・組織への 参加」、「他者とのコミュニケーション」及び「組 織の中での意思疎通・連携行動」の評価項目に も有意差 (p<.05) が見られた。

ルーブリックの回答は「①ファースト・ステ

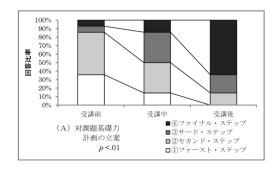
次に、回答の推移について特に顕著な有意差が見られた評価項目をグラフに示す(図1)。いずれも「受講前」の評点①の回答比率が「受講後」には0%になり、一方で、評点④の回答比率が顕著に増加していることがわかった。

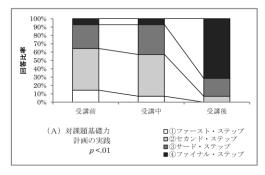
一方、有意な差が認められなかった評価項目の「ストレス対応」、「感情のコントロール」、「モチベーション」及び「自己肯定感」でも「受講後」の評点④は増加している。これらの評価項目に共通する特徴は《自分の気持ち(心)・考え方のコントロール》であり、他の評価項目と異なり、《他者に発信・表現することなく、自分の中で気づいたりイメージしたりして完結する》行動と言える。

次に、「受講前の目標設定」及び「受講中の目標設定」の推移についても「受講前」から「受講後」へと評点④を多く回答しているが、 χ^2 検定を行った結果、全ての評価項目に「受講前」と「受講中」の間に有意な差はなかった。

表 4 評価項目別評点の回答数の推移

表 4 評価項目別評点の回答数の推移						
評価グループ	評価項目	評点	Ⅲ・Ⅳ受講前フードプロジェクト	Ⅲ・Ⅳ受講中	Ⅲ・Ⅳ受講後	x² 検 定
(A) 対課	計画の立案	① ② ③ ④	5 7 1	2 5 5 2	0 2 3 9	**: p <. 01
珠題解決力	計画の実践	① ② ③ ④	2 7 4	1 7 5	0 1 3 10	**: p <. 01
	への参加 規律・組織	① ② ③ ④	3 8 2 1	1 6 5 2	0 2 4 8	**: p <. 05
(B) 対	ーケーション コミュ	① ② ③ ④	3 4 5 2	1 5 6 2	1 1 2 10	**: p <. 05
対人基礎力	疎通・連携行動 組織の中での意思	① ② ③ ④	4 6 3	1 5 6 2	1 1 4 8	**: p <. 05
	ストレス対応	① ② ③ ④	3 3 4 4	1 3 3 7	1 0 2 11	n. s.
(C) 対自己基礎力	トロール スン	① ② ③ ④	2 2 7 3	1 2 6 5	1 0 3 10	n. s.
	ョン モチベーシ	① ② ③ ④	4 3 4 3	1 4 6 3	1 1 4 8	n. s.
	自己肯定感	① ② ③ ④	4 5 3 2	2 5 4 3	0 1 5 8	n. s.
	積自 極主 性性・	① ② ③ ④	4 3 5 2	1 5 6 2	0 1 3 10	**: p <. 01





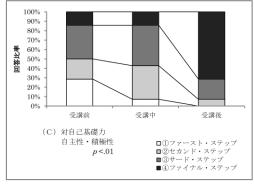


図1 フードプロジェクトⅢ・IV受講における 評点の回答比率の推移

本稿の目的は「学修評価」の視点から、ルーブリックによるジェネリックスキルの測定の可能性に焦点をあて検討することである。前述したように、客観的に測定可能とされているPROGテストによる検証も示唆されている。

しかしながら本調査の対象科目である「フードプロジェクトⅢ・Ⅳ」では、ルーブリックで 一定の学修成果、学生の成長が測定できた。

本調査で注目した評点の推移である「受講前」 と「受講中」つまり「フードプロジェクトⅢ」

を終えた時点では、評点に大きな推移はないが、 「受講後」つまり「フードプロジェクトⅣ」の 受講後には大きく推移していた。この理由とし ては活動内容の違いだと考えられる。「フードプ ロジェクトⅢ」では地域や連携団体からの要請 の枠内で学生たちが話し合い考えた活動を行っ た。しかし「フードプロジェクトIV」では企画 自体から立案し、検討、計画そして実践までを やり通す活動を行った。それについてはルーブ リックの評価項目「計画の立案」と「計画の実 践」での有意差検定に表れていることは確かで ある。いわばアクティブ・ラーニングの成果で あるとも言える。もう1つ注目したいのは学生 の目標設定である。「受講前」と「受講中」の評 点の推移には有意な差が認められなかったとい うことは、学生の目標は「受講前」でも高い目 標を描いているということが考えられる。

本稿で「ルーブリック」が「学修成果」の可 視化に有用であるかを検討したが、ルーブリッ クは到達レベルを段階的に記述式で表し、到達 レベルを評点で表現しているものであり、明ら かに「学修成果」を可視化できるものである。 そこには、ディプロマ・ポリシー、カリキュラ ム・ポリシーそしてシラバスに記した課題及び 到達目標に沿った評価項目と到達レベルを並べ ることが重要である。

いま求められているのは、学生に「何を教えたか」ではなく、学生が「何ができるようになったか」であり、その点においてルーブリックは学生のフィードバックにも活用できるものである⁵⁾。「学修成果」の可視化のねらいは、そこにあるのではないだろうか。

参考文献

- 1) 大学教育再生加速プログラム「文部科学省 大学改革推進事業大学教育再生加速プログ ラム テーマⅡ「学修成果の可視化」実績報 告書(http://www.ap-theme2.jp/_src/2751/ 大学教育再生加速プログラム(AP)テーマⅡ 実績報告書.pdf?v=1576461934126)2020年3 月閲覧
- 2) 江越和夫・石井妙子・山村涼子・安保康治・ 真部真紀子・山下浩子:「学修成果の可視化」 に向けての調査研究」久留米信愛短期大学 研究紀要,第42号,pp39-47,2019
- 3) 眞部真紀子・山下浩子・江越和夫・石井妙子・山村涼子・生地暢・岡輝美・眞谷智美・ 髙松幸子:「学生の成長」可視化のこころみ (1) ーフードプロジェクト活動を通して ー,久留米信愛短期大学研究紀要,第41号, pp35-42,2018
- 4) 眞部真紀子・山下浩子・江越和夫・石井妙子・山村涼子・生地暢・岡輝美・眞谷智美・ 髙松幸子:「学生の成長」可視化のこころみ (2) ~ルーブリックの評価項目の再考に ついて~, 久留米信愛短期大学研究紀要,第 42号, pp49-55, 2019
- 5) Dannelle D. Stevens and Antonia J. Levi, 佐藤浩章監訳,井上敏憲・俣野秀則著「大学 教員のためのルーブリック評価入門,玉川 大学出版部,2019

(2020年3月31日受稿)